保育者からみた現代の家族と家庭教育
―自由記述の分析から―

表　　真　美
（教育学科教育学専攻）

保育者が認知する現代の保護者と子どもの様子，家庭教育について明らかにすることを目的とし，質問紙調査の自由記述をテキストデータ化し，テキストマイニング分析を行った結果，以下の知見が得られた。1）最近の子どもの様子について，保育者は，自分の主張はするが相手の気持ちに気づけない，考えて行動できない，基本的な生活習慣が身についていないと感じていた。2）家庭教育力低下の理由について，保育者は，家族が一緒に過ごす時間が少ない，祖父母から父母への伝達ができていない，情報化により知識ばかりが優先されていると感じていた。3）困惑する保護者について，保育者による記述により，登園時間などの園のルールを守らない，自分の主張ばかりをする保護者の姿が浮かび上がった。4）保育者は，保護者が多様化し，依存的になる中で，保護者対応は難しいが，保護者との信頼関係を築くとともに，個々の子どもたちとのかかわりを大切にして，日々の保育を行いたいと考えていた。

キーワード：保育士，幼稚園教諭，家庭教育，質問紙調査，自由記述

1．はじめに
⑴　家庭教育の現状

家族の変容に伴い，家庭の教育力の低下が言われて久しい。地域や世代間のつながりの希薄化，家庭内で幼い姉妹を世話する機会の減少，ライフスタイルの多様化などが，その背景として論じられている[1)]。1998年の「心の教育」中教審答申が提出され[2)]，2006年に教育基本法10条に「家庭教育」の条文が新設されて以来，国，地方公共団体において，「家庭教育を支援するために必要な施策」が講じられてきた。多くの地方公共団体において「家庭教育支援条例」が制定され，文部科学省は，「早寝早起き朝ごはん」運動や地域の「家庭教育支援チーム」のサポートなどの取り組みを行っている[3)]。このような取り組みに対し「国家の家族・家庭への介入」との批判的な意見もある[4)]。

一方，保育園や幼稚園は，保育施設として，「保護者の子育てに対する不安やストレスを解消し，その喜びや生きがいを取り戻して，子どものより良い育ちを実現する方向となるよう子育て支援」が求められている[5)]。就園児のみならず，未就園児の一時あずかりや，親子への遊び場の提供など，家庭教育支援の担い手としての期待を担っている。

コロナ禍や急速なICT化などにより，乳幼児の育つ家庭環境も変化を余儀なくされている。適切な家庭教育支援を提供するにあたっては，現代の家族と家庭教育について，その実態を詳細に把握する必要があるだろう。乳幼児を育て，教育する家族と日々接している幼稚園教諭，保育士は，現在の家族と家庭教育の実態を最も身近に感じ取れる存在と言ってよい。

⑵　幼稚園教諭・保育士を対象に行った質問紙調査結果の概要と研究の目的

2014年に幼稚園教諭・保育士を対象に行った質問紙調査では，以下のことが明らかとなった。1）幼稚園教諭・保育士は，年長児は協調性や

自己主張，自己抑制に課題があり，園児が以前よりも自己抑制ができなくなっていると感じていた。２）多くの幼稚園教諭・保育士は，家庭教育力は低下しており，家庭教育には関心があるが，しつけや教育のしかたがわからない保護者が多い傾向にあった。３）困惑する保護者は増えており，とくに園や先生に対する依頼が多いとも感じていた。仕事で余裕がなく園に頼ってしまう一方で，関心はあるが子育ての仕方が分からない，人間関係をうまく対処できないために園に頼ってしまう保護者の姿が浮かび上がった。その保護者が育てた子どもは，自己抑制や自己主張など，コミュニケーション能力に課題があることが示唆された。現代の保護者について，子育てに詳しい大日向雅美は「無頓着過ぎる親とがんばり過ぎる親」に大きく二極分化していると述べている[6]。同調査でも，同様の傾向が見られた。また，様々な情報が溢れる時代に，「宗教」といった家庭教育に対する指導の拠り所をもつことがプラスに働く可能性も示唆された[7]。

同調査では，自由記述質問に多くの回答が寄せられたが，詳細な分析をしていなかった。そこで本研究では，自由記述をテキストデータ化，テキストマイニング分析を行い，保育者が認知するより詳細な保護者と子どもの様子，家庭教育について明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

⑴　調査の概要

2014年１月～３月に，2009年に筆者が実施した保護者対象調査[8)9)]の際に協力があった京都市内の64の私立幼稚園・私立保育園に郵送にて幼稚園教諭・保育士を対象とする自記式質問紙調査の実施を依頼した。その64園に依頼したのは，調査後も結果報告などを通じて交流があったので，協力が得やすいと考えたためである[註1)]。調査にあたっては，個人情報の保護に配慮した[註2)]。

園への依頼書とともに，園の募集定員から職員数の概数を予測して調査対象者への依頼書と調査票を送付したところ，17の幼稚園，24の保育園から実施済み調査票の返送が得られた。協力園は，京都市内の全幼稚園の14.8％，同保育園の9.8％である。幼稚園教諭184名（36％），保育士324名（64％），計508名の職員から回答があり，分析対象とした。主な調査項目は，１）子どもの自立，２）家庭教育の低下，３）困惑する保護者，４）日々の保育で重視すること，５）保育方針，６）仕事の悩み，であった。

⑵　調査対象者の概要

回答者の性別は，女性94％，男性４％，不明４％であった。勤務形態は，正規雇用81％，非正規雇用15％，不明４％，年齢は，20歳から78歳で，20歳代44％，30歳代23％，40歳代19％，50歳以上13％，不明１％，平均34.8歳であった。在籍年数は，１年から45年で，１～５年42％，６～10年12％，11～15年14％，15～20年12％，20年以上14％，不明６％，平均年数は10.5年であった。職種は，園長２％，主任８％，クラス担任72％，その他17％，不明１％であった。

⑶　分析対象の自由記述

今回分析対象とした自由記述は，１）「現在の子どもは以前と比較して変わった」と回答した理由について具体的な子どもの様子，２）家庭教育力低下の理由，３）保護者の態度に困惑した経験の内容，４）子どもや保護者，子育て・家庭教育についての意見，日頃感じていること，の４点である。各々184名，78名，80名，114名から回答を得た。

⑷　分析方法

KH Corder3テキストマイニングツール（2020年９月15日取得）を用いて記述を分析した[10)]。４つの自由記述について，まず，語の抽出を行い上位30の頻出語を示した。次に，多次元尺度法により抽出語間の共起性を測定，共起ネットワークを図示し，共起係数を表示した。

２．研究結果

⑴　子どもの様子

当該の質問は，「Ａ．基本的生活習慣が身についていない，Ｂ．自己主張ができないようになった，Ｃ．協調性がなくなった，Ｄ．自己抑制が出来なくなった，Ｅ．好奇心がなくなった，Ｆ．思考力・論理性が身に付いていない，Ｇ．

基本的な学力が身に付いていない」の７項目について，「現在の子どもさんは（上記７項目について）以前と比較して変わったと思いますか。あてはまる番号に〇をつけてください。（在職年数の短い先生は，ご自分が子どもだった頃と比較して下さい。）」との質問に「とてもそう思う，思う，思わない，全く思わない」の４件法で回答を求めた。そして，「（上記の）質問に１つでも4.3（とてもそう思う，思う）と回答した理由について，日頃の保育で接しておられる具体的な子どもさんの様子をお聞かせ下さい。」として自由記述を求めたものである。従って，７項目の社会性等に関する行動が念頭に置かれている。質問紙の早い段階での質問であったので，184名という多くの回答が得られたと考えられる。

上位30位までの抽出語を図に示した（図１）。名詞では，「自分」「思い」「自己」，サ変動詞には「生活」「食事」が上位に上がり，質問項目にある生活習慣や自己抑制について多くが語られていることが推察できた。共起ネットワークでは，最小出現数を15，描画する共起関係を上位50に設定し，共起関係の係数を表示した結果，６つのカテゴリが認められた（図２）。「思う」「自分」を中心としたカテゴリ（01）。「人」「話」から成るカテゴリ（02），「大人」「少ない」から成るカテゴリ（03），「聞く」「考える」から成るカテゴリ，「生活」「遅い」「時間」を中心としたカテゴリ（05），「自己」「主張」「気持ち」から成るカテゴリであった。

まず，頻出語である「自分」については「自分の主張はするが，折り合いをつけるのは苦手」「自分の思いを通し相手を思いやる気持ちが持てなくなってきている」など自分勝手な子どもの様子について語る記述が多くみられた（01）。「自己」は17件中10件が「自己主張」であり，「自分」と同様に「自己主張は強いが相手の気持ちに気付けず，お互いが主張し合っていることが多い。」のような記述が目立ち，それ以外は「自己中心的」であった（06）。「考える」は「考えて行動できない」「考える力が身についていない」と言う記述であった（04）。「話」は「人の話を聞くことが苦手」といった記述（02），「生活」については「朝」「遅い」と強い共起関係にあり，多くの記述に就寝時間が遅いため起床時間も遅く，朝食を食べなかったり，登園時間に遅れるなどの実態が訴えられていた。

⑵　家庭教育力低下の要因

当該の自由記述に関して，まず「家庭教育力は低下していると思いますか」との質問に対して「とても思う，ある程度思う」と回答した人に対して「Ａ．しつけや教育のしかたがわからない親の増加，Ｂ．家庭教育に関心のない親の増加Ｃ．仕事などで忙しい親の増加，Ｄ．親子のコミュニケーション不足，Ｅ．園に教育をまかせすぎ，Ｆ．テレビやテレビゲームの影響，Ｇ．自然体験など様々な体験機会の減少，Ｈ．地域や近所の大人と触れ合う機会の不足，Ｉ．気軽に相談できる相手や場所の不足」の９項目

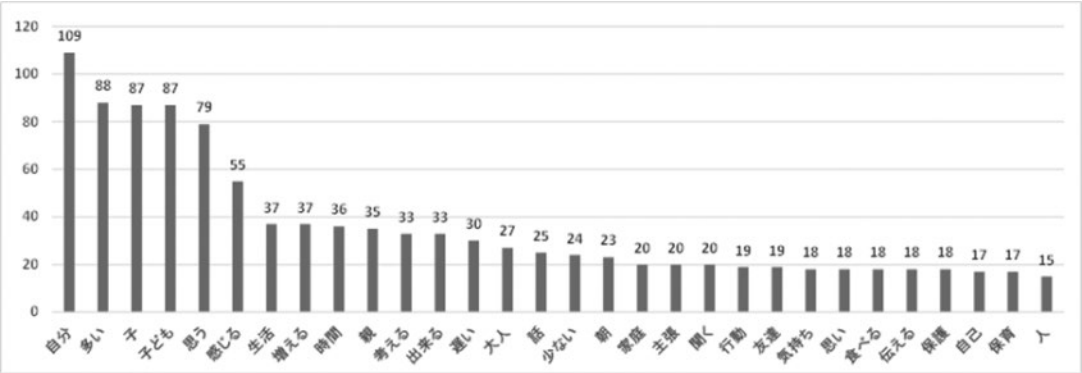

図１　「子どもの様子」についての自由記述における抽出語（上位30）

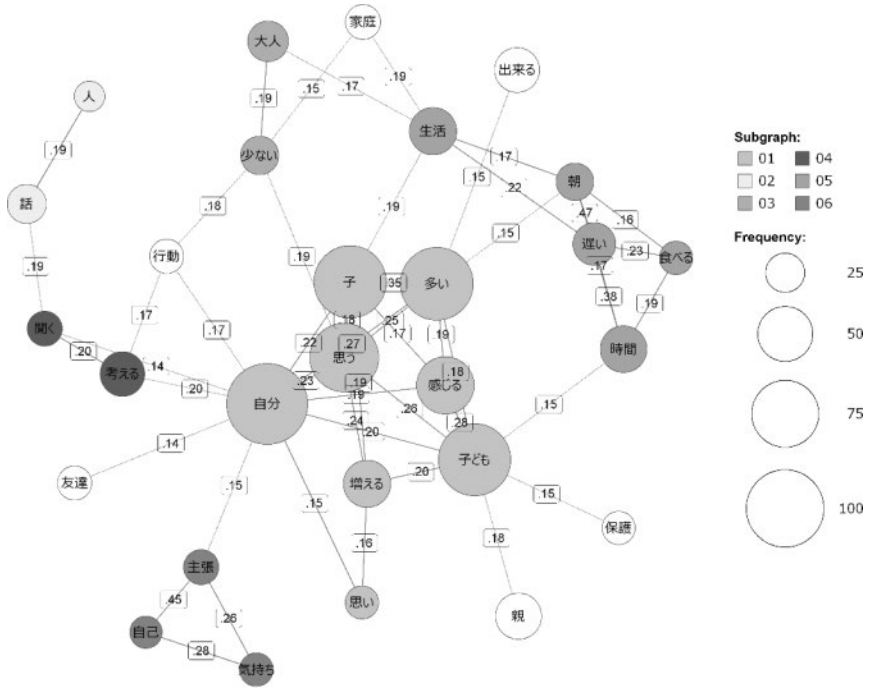

図２　「子どもの様子」自由記述の共起ネットワーク

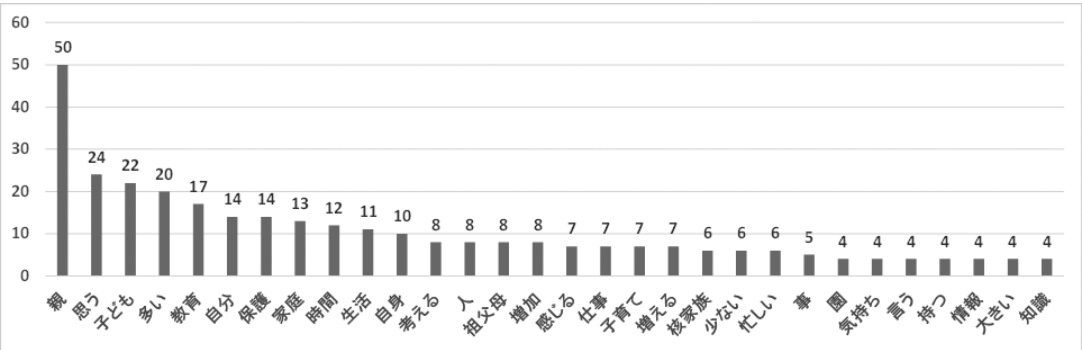

図３　「家庭教育力低下の理由」についての自由記述における抽出語（上位30）

をあげて家庭教育力低下の理由について「とてもそう思う，思う，思わない，全く思わない」の４件法で回答を求めた。そして，「家庭教育力低下の理由について，上記の他にお考えがあればお聞かせ下さい。」として空欄を設け回答を求めたところ，78件の回答が得られた。

抽出語では，「祖父母」「核家族」「仕事」などの特徴的な語が出現した（図３）。最小出現数を４，描画する共起関係を上位50に設定し，共起関係の係数を表示した結果，６つのカテゴリが認められた（図４）。「思う」「保護」を中心としたカテゴリ（01），「子育て」「核家族」から成るカテゴリ（02），「増える」「人」「持つ」から成るカテゴリ（03），「祖父母」「低下」から成るカテゴリ（04），「時間」「忙しい」「仕事」を中心としたカテゴリ（05），「知識」「情報」から成るカテゴリ（06）であった。

まず，様々な「親」が語られた。とくに「自

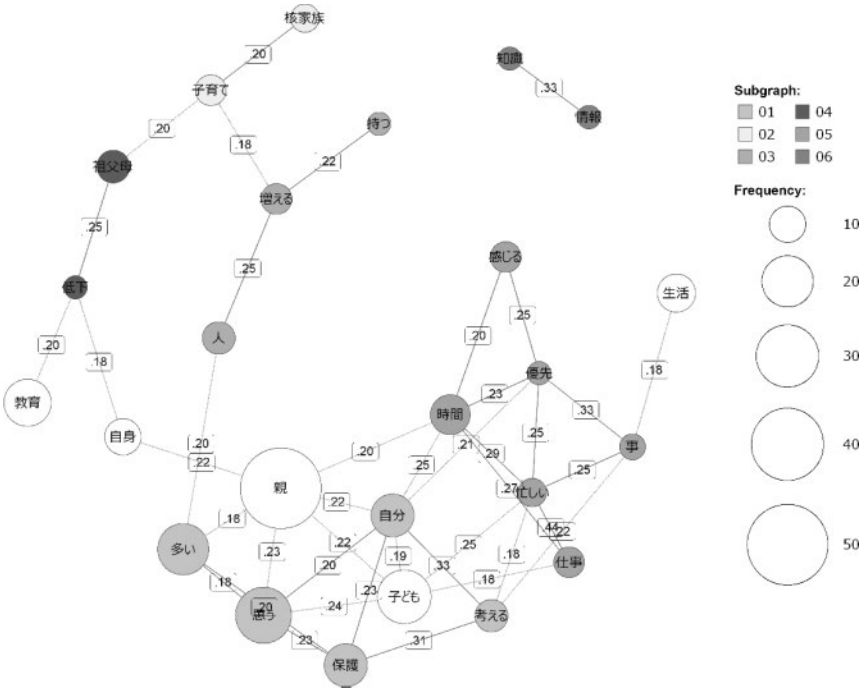

図４　「家庭教育力低下の理由」自由記述の共起ネットワーク

分」と結びついた「親が子どもよりも自分を優先」「親が自分の時間を欲しがる」，仕事が忙しく，親子が接し一緒に過ごす時間が少ない，と言った意見が複数見られた（01・05）。また，「核家族が増え，子育て等すぐに聞ける人がいない」(02)，祖父母が子どもの親に家庭教育の伝達ができていない（04）というものであった。さらに「情報化により知識はあるが，現実がついていっていない」(06）との回答が見られた。

⑶　困惑する保護者

当該の自由記述は，「Ａ．園や先生に対する依頼が多い，Ｂ．園長先生や自治体の管轄部署に話をする，Ｃ．子どもに対する指導について反論・反発する，Ｄ．子ども同士のケンカやいざこざに介入する，Ｅ．保育料や給食費・教材費などを払えるのに払わない，Ｆ．行事の役割・配役・出場競技にリクエストがある，Ｇ．クラス編成についてリクエストをする，のような保護者の態度に接することがありますか」との質問に「とても多い，多い，あまりない　全くない」の４件法で回答を求めた後，「上記のような状況の他に，保護者の態度に困惑した経験があれば，その内容をお聞かせ下さい。」として空欄を設け，80名から回答を得た。

抽出語には，ケガ，意見，理解，対応などの特徴的な語があがっていた（図５）。最小出現数を５，描画する共起関係を上位50に設定し，共起関係の係数を表示した結果，６つのカテゴリが認められた（図６）。「子ども」「保護」を中心としたカテゴリ（01)，「家庭」「方針」を中心としたカテゴリ（02)，「時間」を中心としたカテゴリ（03)，「園」「生活」を中心としたカテゴリ（04)，「園」「伝える」「子」から成るカテゴリ（05)，「保育園」「対応」「場合」から成るカテゴリであった。

「他の保護者との話に夢中で子どもを見ていない」(01)，「家庭での方針を強調される」「家庭で保育できる場合でも，土曜日などの保育を毎回利用」(02)，「保育園がお願いした事を守ってもらえない（髪の毛，登園時間など)」(03)，「伝え方はとても難しい」(05)，「ケガをしたとき直接相手に苦情を言う」「集団生活で

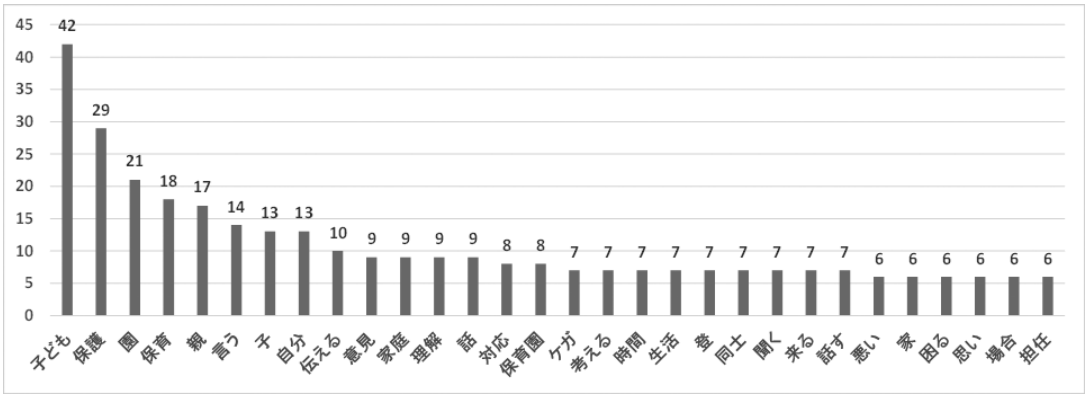

図５　「困惑する保護者」についての自由記述における抽出語（上位30）

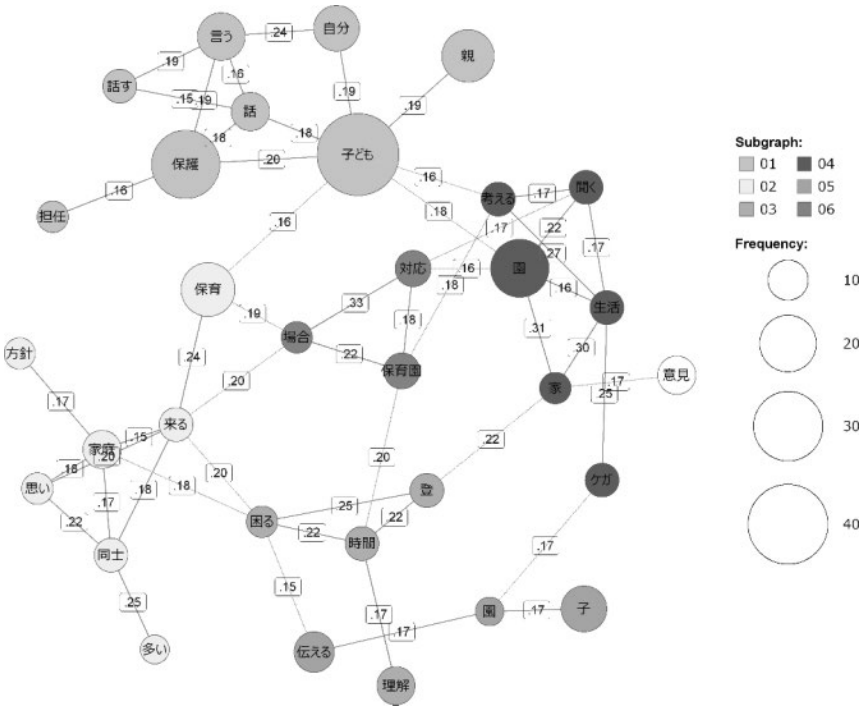

図６　「困惑する保護者」自由記述の共起ネットワーク

あることを忘れがち」（04）などの回答が見られた。

⑷　日頃感じていること

当該の自由記述は，質問紙調査の最後に「子どもさんや保護者，子育て・家庭教育について，ご意見，日頃感じておられることなどがありましたら，どんなことでも結構ですので，ご記入ください。」とし，大きめの空欄を設けたところ，114名から回答を得た。

前述の３つの自由記述には見られなかった特徴的な抽出語として，「環境」「社会」「大切」「必要」と言った語が見られた（図７）。最小出現数を10，描画する共起関係を上位50に設定し，共起関係の係数を表示した結果，７つのカテゴリがみられた（図８）。「大切」「保育」から成るカテゴリ（01），「子」「難しい」を中心とし

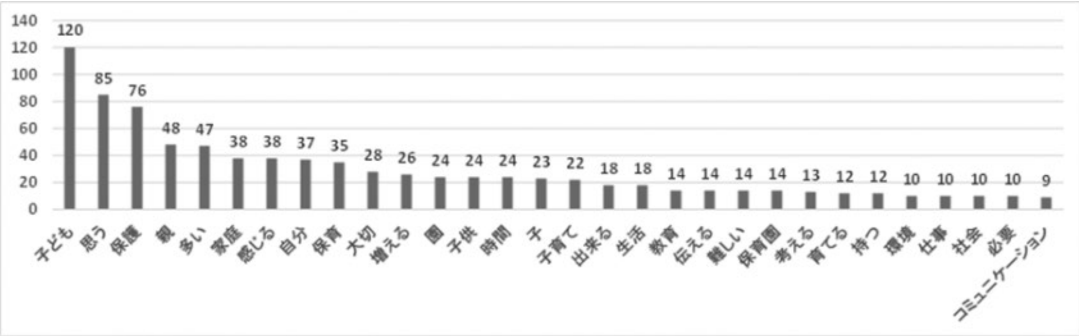

図7　「日頃感じていること」についての自由記述における抽出語（上位30）

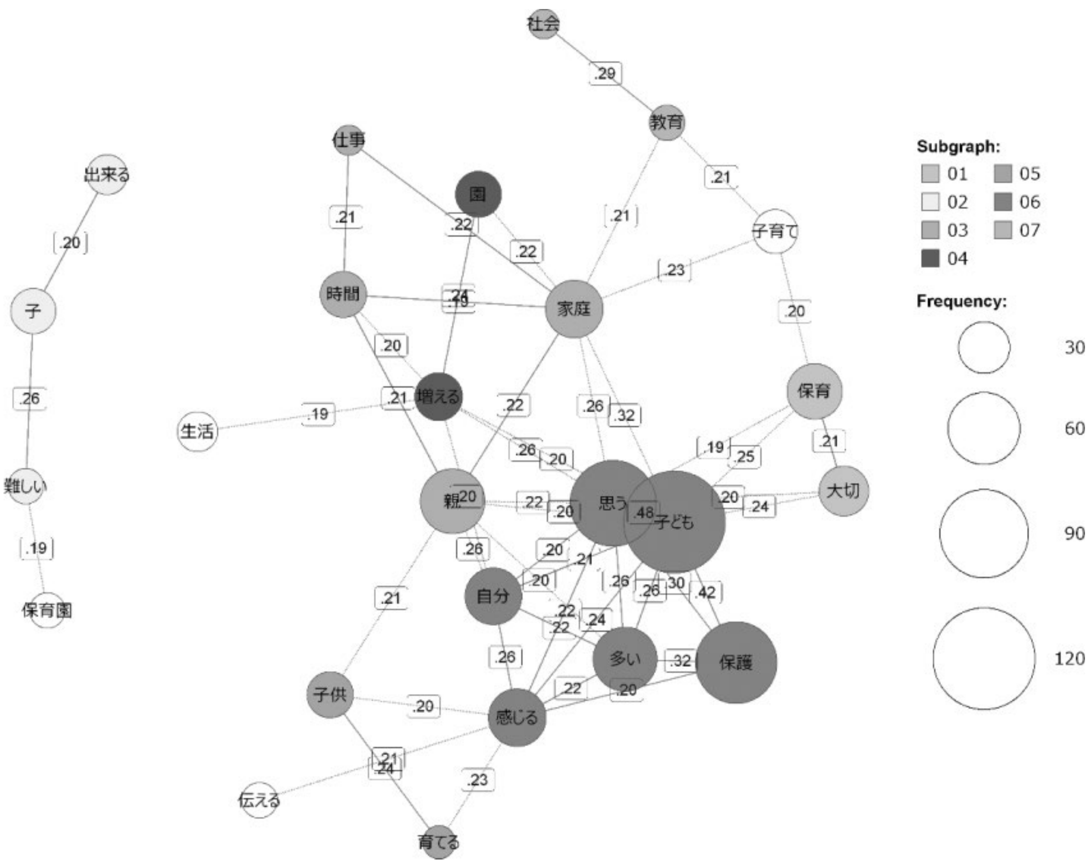

図8　「日頃感じていること」自由記述の共起ネットワーク

たカテゴリ（02），「時間」「家庭」を中心としたカテゴリ（03），「園」「増える」から成るカテゴリ（04），「保育」「大切」から成るカテゴリ（05），「子ども」を中心としたカテゴリ（06），「教育」「社会」から成るカテゴリであった。

ここでは，保育者が日頃大切にしていることが多く語られた（01）。自身の保育に大切なこととして「自分自身の精神状態が健康であること」「その子どもの家庭にあった保育」「子ども一人一人」「個々のかかわり」「保護者のケア」「保護者と話す機会を多くし信頼関係を築く」「家庭とのしっかりとした連携」「みんなで育て

ていくという気持ち」「子どものやろうとする気持ち」等，子どもにとって大切なこととして「大きな自信をつけていくこと」「遊具で手足のバランスをつくる」等，保護者にとって大切なことは「親子で過ごす時間」「父親とのバランス」「親同士親しくなること」等，保育者・保護者にとり大切なことは「余裕をもって接すること」「コミュニケーション」等であった。「難しい」こととして，「多様化する親の価値観」，また「依存的な親」の増加により保護者対応が難しいことが複数語られた（02）。「時間」は保護者が子どもと関わる時間に言及する記述が多かった。「少しでも早く迎えに行こうという思いが薄れている」といった意見は複数見られた（03）。また，「多く」なった様々な現代の保護者像が描かれた。「子どもの言いなりになってしまっている」「園の行事の参加やお手伝いなど（に）消極的」「ルールが守れない」「一緒にいるのに子どもをみていない」「忙しくしている」「親の都合で行動する」「過保護すぎたりどうしていいのかわからず放置に育てすぎたり極端」「自分の子どもさんの事ばかりに必死で周りがみえていない」「子どもにどう接したらいいのかわからない」「保護者同士よくしゃべり（子どもは）ほったらかし」「全般的に子どもにあまい」等であった（06）。さらに，「ゆとり労働のできる日本社会」「発達以上のことを（子どもに）要求しない社会」「社会全体で子どもを見守る」ことが求められていた（07）。

4．まとめと今後の課題

保育者が認知する現代の保護者と子どもの様子，家庭教育について明らかにすることを目的とし，質問紙調査の自由記述をテキストデータ化し，テキストマイニング分析を行った結果，以下の知見が得られた。

1）最近の子どもの様子について，保育者は，自分の主張はするが相手の気持ちに気づけない，考えて行動できない，基本的な生活習慣が身についていないと感じていた。

2）家庭教育力低下の理由について，保育者は，家族が一緒に過ごす時間が少ない，祖父母から父母への伝達ができていない，情報化により知識ばかりが優先されていると感じていた。

3）困惑する保護者について，保育者による記述により，登園時間などの園のルールを守らない，自分の主張ばかりをする保護者の姿が浮かび上がった。

4）保育者は，保護者が多様化し，依存的な保護者が増える中で，保護者対応は難しいが，保護者との信頼関係を築くとともに，個々の子どもたちとのかかわりを大切にして，日々の保育を行いたいと考えていた。

保育者の自由記述より，子どもを育てる現代の家族と家庭教育が明らかとなった。基本的生活習慣身の習得をはじめ，本来家庭で行うべき教育が出来ていないなかで，園の負担が増大していることが伺われる。保育者の自由記述にあるように「社会全体で子どもを見守る」ことの重要性が示唆された。

今回の調査で明らかになった「家庭教育力低下」を，単に現代の家族の変容が生み出すものと解釈するのは適切ではない。「働き方改革」を唱えながらも，ワークライフバランスが実現に至らず，父親の子育て関与が遅々として進まない構造的な問題が，背景として存在することは明らかであろう。父親不在の無職の母親は子育てネットワーク不足から，有職の母親は時間的余裕のなさから，保育者に依存せざるを得ない状況に追い込まれている状況が推察される。時間的な余裕が心の余裕となり，子育てにも余裕が生まれると考えられる。ワークライフバランスの実現に加え，育児＝母親の仕事，という社会通念の払しょくが急務である。

2020年12月21日，厚生労働省が「新子育て安心プラン」を公表した。保育の受け皿を増やし，待機児童をなくす計画が強調されている。単純な受入数の確保だけでなく，保育者の労働条件の向上によって，保育の質を上げることが肝要であろう。保育者と保護者が共に，真に安心して次代を担う世代を育成することが出来るように，社会全体で支援することが喫緊の課題である。

今後は，今回明らかとなったような状況下での，保育者養成の在り方について検討していきたい。

註

1）2009年調査では，京都市の全認可保育園から乳児保育園を除く246園，全市立幼稚園99園（京都市立幼稚園に関しては京都市より不可との回答があった）の計345園に依頼したところ，71園から協力可能との回答があり，各園の３・４・５歳児の数に応じて調査票を郵送，各園において保護者を対象に留め置き法により調査が実施された。保育園40，幼稚園24，計64園より調査票の返送があり，有効回収数は各々1,617,2,909票，計4,526票を分析対象とした。京都市内の園を対象に選んだのは，卒業生が勤務し，実習を依頼するなど，本務校とのつながりが強く，協力が得やすいと考えたからである。京都市は仏教系の園の比率が他都市より大きいことが特徴である。主な調査項目は，子どもの生活習慣，塾・習い事，子どもの性格認知，教育期待，家庭教育，子育ての実態，子育て感，子育て観，子育てネットワーク，子育て支援の利用であった自営業の母親が積極的に家庭教育，子育てを行っていること，園を選ぶ際に宗教を重視している保護者，宗教系の園に子どもを通わす保護者が積極的に家庭教育，子育てを行っていることなどが明らかとなった。詳細は文献番号８）９）を参照されたい。

2）調査にあたっては，個人情報保護の観点から，調査対象者への依頼書と調査票を封筒に入れ，回答は封筒に封入して回収するようにした。依頼書には，調査の目的，無記名で個人情報が漏れることはないこと，研究以外の目的に使用しないこと，答えにくい質問には答えなくてもよい旨を明記した。得られた回答，入力したデータは個人情報漏えいがないよう，厳重に保管するなど十分に配慮した。

文献

1）文部科学省（2005）「家庭教育の現状とその支援上の課題」『平成17年度版文部科学白書 教育改革と地域・家庭教育力の向上』 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpba200501/001/002/0102.htm（2020年10月15日入手）

2）中央教育審議会（1998）「「新しい時代を拓く心を育てるために」―次世代を育てる心を失う危機―（中央教育審議会（答申）平成10年６月30日）」

3）文部科学省ウェブサイト「子供たちの未来をはぐくむ家庭教育」 http://katei.mext.go.jp/index.htm（2020年10月15日入手）

4）マガジン９ウェブサイト「本田由紀さんに聞いた（その１）：国家による「家庭への介入」がはじまっている（2017年７月26日）」 https://maga9.jp/interv170726/（2020年10月15日入手）

5）文部科学省ウェブサイト「幼稚園における子育て支援」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1416684.htm（2020年10月15日入手）

6）大日向雅美（2009）「離乳食で保護者を追い詰めないために―指導ではなくエンカレッジを」『食生活』103（12），56－59

7）表真美（2015）「保育者がとらえる子どもの自立と家庭教育―幼稚園教諭・保育士を対象とした質問紙調査から―」『家政学原論研究』49，30－41

8）表真美（2012）「現代の子育て・家庭教育」『家庭と教育　子育てと家庭教育の現在・過去・未来』ナカニシヤ出版，3－14

9）表真美（2015）「宗教観と子育て・家庭教育」『京都女子大学宗教文化研究所紀要』28，63－78

10）樋口耕一（2020）『社会調査のために軽量テキスト分析　内容分析の継承と発展を目指して第２版』ナカニシヤ出版

謝辞

調査にご協力頂いた保育士・幼稚園教諭の先生方に厚く感謝いたします。